

Title	邦訳リカアド才原論解題
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1927
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.21, No.2 (1927. 2) ,p.141(1)- 201(61)
JaLC DOI	10.14991/001.19270201-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19270201-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19270201-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

宮内省御用達

株式東洋軒

電話高輪

特長二、八七〇  
二、八七二

○生命保險會社協會地下室

東洋軒丸ノ内支店

電話大手六八八七番

三田學會雜誌 第二十一卷 第二號

邦譯リカアドオ原論解題

小泉 信三

リカアドオの「經濟學及び租税の原理」は一八一七年に始めて刊行せられ、著者存生中には一八一九年と一八二一年とに二度版を重ねた、マルサス(T. R. Malthus)の人口論(第一版一七九八年)に後るゝこと約二十年、アダム・スミス(Adam Smith)の國富論(第一版一七七六年)に後るゝこと約四十年の事である。此の約四十年は近世英國經濟史上に於て甚だ重要な一時期を成して居る。工場工業の出現に基づく産業革命は此期間内に略ぼ完了し、其と共に、英吉利は穀物輸出國より轉じて穀物輸入國となり、又英吉利は此期間の前半に於て亞米利加植民地の獨立に遭ひ、其後半に於て奈翁戰爭を閱みしたのである。斯る時代に生れたリカアドオは、如

何なる性格如何なる閱歷の人であつたか。其著書は如何なる事情如何なる影響の下に書かれたものであつたか。

デボッド・リカードオは和蘭から英吉利に移住し歸化した猶太商人の子として、一七七三年四月十九日倫敦に生れた。祖先は宗教的迫害の爲め西班牙半島を逃れて伊太利リヴォルノ(Livorno)に移住し、十八世紀の始め更に同じ理由に由て伊太利から和蘭アムステルダムに移住したものである。リヴォルノの産 David Israel Ricardo なる者一六九二年同地の Estrela de Joseph Anadíos を娶り、三子を生み、其次子 Joseph Israel Ricardo は一七二七年 Hanna Abas を娶つて四男二女を得た。一七五〇年に生れた季子 Abraham Israel Ricardo が即ち經濟學者リカードオの父である。リカードオの父が和蘭から倫敦に移住したのは、一七六四年の頃、その歸化を請願して特許を得たのは、一七七〇年の事である。其業務としては始め商品賣買、後に手形及び株式仲買を主として營んだ。彼れが一七七三年、倫敦市參事會が十二を限つて猶太人團に特許せる仲買人の株を讓受け得たのを見れば、在倫敦の猶太人中

にあつて有力なる地位を占め得てゐたものと謂ふことが出來やう。デボッド・リカードオは此の前年に「數多き家族の第三子」として生れた。(J. H. Hollander, David Ricardo, A Centenary Estimate, 1910)

リカードオは其少年時の教育に就いてはアダム・スミスやマルサスとは全然境遇を殊にした。彼れは他の兩者の如く教壇に講義するといふ經驗を生涯有たず、に終つた許りでなく、全然高等の教育を受けなかつた人である。彼れが少時先づ英國に於て、次いでアムステルダムの伯父の許に於て授けられた教育は、全然實用を主にしたもので、十四歳の時には早くも父の業務に従事することを命せられたのである。マツカロックはリカードオが少年の頃より、抽象的推理の嗜好を示し、彼れの性格の特徴たる興味の主題を其根柢まで究め、其に關する一切の意見を其心の確信に従つて立てる決意を示したと記し (McCulloch, Life and Writings of Mr. Ricardo, Works of D. Ricardo edited by McCulloch, XVI) 或者は此の「抽象的推理の嗜好を猶太人の特長とする所だと謂つて居るが (Alfred Marshall) 兎に角父の家庭の空氣は、決してリカードオの學者理論家たる傾向を助成するものでなかつたことは明で

ある。彼れは古典哲學古典文學に通ずる機會を得なかつた。後に彼れは好んで沙翁を讀んだと傳へられてゐるが、是とても恐らく散漫なる學習に過ぎなかつたのであらう。後に經濟學に志してからは、スミス、マルサス、セエを始め、當時著名の經濟學者の著作に親しんだことは事實であるが、此場合にも彼れの涉獵は決して廣きには涉らなかつた。彼れは讀書人の型に屬する人ではなかつたのである。故に彼れの著作は、大體に於て其の天賦の推理力思考力と是に訓練を加へた其實務上の經驗とであつたと謂ふことが出来る。

實務上の經驗に就いては、リカアドオは夙く其才能を發揮する機會に遭遇した。それは彼れが嚴格なる父の意に逆つて基督教徒(Edward Wilkinson Esq. の女 Priscilla Ann.)と結婚した爲め、年二十一にして父の許を去つて獨立自活するの已むなきに至つたからである。リカアドオ自身の才能と同業先輩の同情とに依つて、彼れの株式仲買人としての成功は甚だ速かであつた。嘗に數年にして相當の資産を爲したのみならず、更に進んで奈翁戰爭終局の頃には、英國財界の有力人物のみを以て組織さるゝ公債引受團の一員となり、次いで多くの成功實業家と同様に、田園に

土地を邸宅(Gatcomb Park, Gloucestershire)とを購入して郷紳の生活を營み、更に一八一九年には株式取引所を退き、同じ年愛蘭土のポオターリントン(Portarlington)から下院議員に選舉せられた。株式取引所を退く前後から、リカアドオは其資産を漸次有價證券から土地に移したが、一八二三年秋病歿の時には、遺産全額は七十萬磅に上つたと記されて居る(Letters of D. Ricardo to T. R. Malthus. 1810-1823. Edited by J. Bonar. 1887. p. VIII, Note.) 一八二四年度の死亡者傳記(Annual Biography and Obituary for 1824)中に掲げられた、リカアドオ近親の筆に成るものと推測すべき略傳は、株式仲買としてのリカアドオの手腕に就いて下の如く記して居る。「致富の才能なるものは、大に尊重を受けては居らぬ。併しR氏(リカアドオ)は其異常なる力量を、他の如何なる事に於ても恐らく其業務上に於けるより以上には發揮しなかつたであらう。業務の有ゆる複雑なる細目に對する氏の完全なる智識、數字及び計算に對する氏の驚くべき敏慧、その關係せる莫大なる取引を何等努力の態なく處理する能力、氏の冷靜と判斷とは、無論氏に取つて好運なる公共事件の綜合とも相俟つて、氏をして株式取引所に於ける凡ての同僚を遙に凌駕して、嘗に資産上のみならず、

一般的名望及び聲價の上に於て、取引所に於て嘗て何人がしたよりも無限に高く立身することを能くせしめた。此等の才能が其儕輩に與へた印象は彼等の中の最も慧眼なる數人の者をして、氏が有名の人物となるより遙か以前に嘆賞して氏が他日必ず國家に於ける最高位置の或物を占むべきことを豫言せしめた程のものであつた。(Works of D. Ricardo, p. XVII)

リカードは高等の教育は受けなかつたが、元來好學の人であつた。生計上の懸念が去るに及んで、此好學心は先づ數學化學地質學鑛物學の研究に向ひ、或は電氣實驗を試みて人に示し、他に先じて其家に燈用瓦斯を採用し、或は鑛物標本陳列の爲め實驗室を設けなごしたことが傳へられてゐる。而してリカードをして此等の自然科學を閑却するに至らしめたものは、彼れの經濟學に對する興味であつた。傳ふる所に由れば、此興味は一八九九年彼れが其妻の健康の爲めに滞在した浴泉地バアス(Bath)に於て一日偶々ネミスの國富論を見たことに依て始めて喚起せられたものである。

リカードが始めて經濟學に志してから其處女作を以て世に見える迄には、猶ほ十年の歳月が経過する。リカードが國富論を知つた時から四年を経てマルサス人口論の第二版が出た(一八〇三年)。リカードは後年マルサスに、其人口論の第一版を読んだと告げてゐるに徴すれば(Letters to Malthus, p. 107)その始めてマルサスを読んだのは此時以前の事でもあつたらうか。此以外に如何なる書籍から影響を受けたかは、明瞭でない。ホランダアは十九世紀最初の十年間に公刊せられた重なる經濟書として Boyd, Letters to Pitt, 1801—Thornton, Paper Credit, 1802.—Brougham, Colonial Policy, 1803—Lord King, Bank Restriction, 1803—Lauderdale, Public Wealth, 1804.—Parnell, Currency in Ireland, 1804—Foster, Commercial Exchanges, 1804—Lord Liverpool, Coins of the Realm, 1805.—Macpherson, Annals of Commerce, 1805.—William Spence, Britain Independent of Commerce, 1807.—James Mill, Commerce Defended, 1807.—Torrens, Economists Refuted, 1808.—Chalmers, National Resources, 1808. を擧げてゐる。彼れは恐らく此中の或者を讀んで刺戟を受けたことゝ想像される。リカードが「エディンバラ評論」(Edinburgh Review)に掲げられた經濟論說の愛讀者であつたことは、彼自身の告白する所に依て確實である。

書籍と相並んで論ずべきは、交友の影響である。リカードオの最も親密なる友として擧ぐべきものは、ジェームズ・ミル (James Mill) マルサス (T. R. Malthus) ハッチェス・トラファ (Hutches Trower) 及びマツカロックであらう。相知ること最も古きはトラファである。彼れはリカードオよりも五歳年少で(一七七七年生一八三三年死)リカードオと同じく株式仲買たり、英蘭銀行株主たり、而して又後に田園に郷紳の生活を營んだこともリカードオと同様なる人であつた。そのリカードオとの相識關係は、同業者として株式取引所に於て相接觸するに始まつたものである。リカードオはトラファが同じくアダム・スミスを嘆賞し、又夙くエヂンバラ評論に掲げられた經濟論說の愛讀者たることを知つて大に喜び、二人は屢々業務の閑を窃んでは、取引所に經濟學上の問題を談じた (Letters of Ricardo to Hutches Trower and Others 1811-1823. Edited by J. Bonar and J. H. Hollander. 1899. pp. 45-6)。後にトラファが互に相知らずして、最初の對リカードオ論争者となつたことは、後述の通りである。ジェームズ・ミルは恐らくリカードオとの交情最も親密なりし人であらう。ミルは冷靜嚴格にして情に動かさるゝこと少なき人を見られて居つた。而かも此

の冷靜なるミルがリカードオの死に逢つて悲嘆することの甚しかつたことは、寧ろ人を驚かしめた。グロオト夫人 (Mrs. George Grote) の如きは、茲に始めてミルの人情に切なる一面を見て、却てミル其人に對する敬慕の念を加へたと記して居るのである (Bain, James Mill, p. 211)。ミル(一七七三—一八三六年)は一靴工の子に生れ、エヂンバラ大學に於てダガルド・ステュワート (Dugald Stewart) に就いて學び、一八〇二年倫敦に出て文筆を業としたが、その始めて世間の注目を引いたのは、一八〇七年「商業辨護論」(Commerce Defended) を著してキリヤム・スペンス (William Spence) の貿易無用論を駁したに始まる。スペンスは同年「貿易無用論」(Britain Independent of Commerce) を著して、英吉利國力の眞泉源は農業に在り、奈翁の封鎖恐るゝに足らずとの論を爲し、コベット (William Cobett) も亦た是に賛同して世間の歡迎を受けたのであるが、ミルはチャルマース (Chalmers) トレンス (R. Torrens) と同じく、此を失當として、其意見を發表したのである。而しミルの子ジョン・ステュアート・ミル (John Stuart Mill) の記す所に由れば、リカードオとミルとの相識も亦た始め此著書に由て媒介せられたものゝやうである (J. S. Mill, Principles of Political Economy. Edited by W. J. Ashley pp.

5623)。シエナムス・ミル傳の著者ベインが、ミルとリカアドオとはベンサム(Jeremy Bentham)を通じて一八一一年始めて相知つたと記してゐるのは、年月に就いては、一八二三年五月十九日附を以てミルがマツカロックにリカアドオの死を報ずる書簡中「最も愉快なる交際の十二年の回想」の言あるに基づくものか。併しリカアドオがミルとベンサムとを知つた順序の先後は、事實に反して居る。リカアドオ自身のベンサム宛書簡に由て、彼れがミルを通じてベンサムを知るに至つたとは略ぼ明白だからである(Letters to Tower, pp. 1-2)。而してミルはベンサムの最高弟たるの位置に居り又ベンサムが唱導した真理の「最も忠實最も熱烈なる信奉者」を以て自ら任じた。「予はミルの精神上の父であつた。而してミルはリカアドオの精神上の父であつた。従つてリカアドオは予の精神上の孫であつた」といふベンサムの言は、屢々人の引用する所である。是は功利主義社會哲學に關していへば、此通りであらう。併し經濟學に就いては、二者の關係は反對であつた。リカアドオの述作がミルの獎勵刺戟に負ふ所が多かつたことは明白な事實であるが、學說其者に就いていへば、大體に於てミルは受け、リカアドオは授ける位置に居たのである。

前記書簡の終りにミルはマツカロックを己れとを以て「彼れ(リカアドオ)の二人の——唯二人の——純粹なる弟子」と稱して居る(Bain, p. 211)。マツカロック(J. R. McCulloch)とリカアドオとの交際は、一八一六年以來先づ文通に由て始まり、一八二三年即ちリカアドオ没年の春に至つて、マツカロックは始めてリカアドオを訪問した。マツカロックも亦た常にリカアドオの説に傾聴する態度を取つた。リカアドオが後に前目の自説に修正を加へるに至つても、マツカロックが依然其の舊説を守つて動かない爲め、却つて此に向つて其説の單純に失することを説明したやうな場合もあつたのである。

マールサス(一七六六—一八三四年)に至つては、リカアドオと意見を異にして説を戦はすこと最も多く、従つてリカアドオの學問的進歩に刺戟を與ふること最も大なりし友人である。マールサスは劍橋大學を卒業し、人口論の著述に依つて天下問題の人となり、一八〇五年以來東印度會社が設立したヘイライベリイ學校(Haileybury College at Haileybury)の史學、經濟學教授であつた。今保存せられてゐるリカアドオのマールサス宛書簡中の最も古きは一八一〇年二月二十五日附のものであるが、此書

箇中に於て、彼れは既にマルサスと説を戦はした外國爲替問題の事を述べてゐるに徴すれば、二人は一八〇九年には既に交を訂してゐたものと推定せられる。リカアドオが如何にしてマルサスを知るに至つたかは、今考ふべき材料がない。兎に角リカアドオは人口論第一版を讀んでゐた。マルサスがリカアドオを認めたのは何時の事であつたらうか。リカアドオ自身に由れば、彼れをミル及びマルサスと親密ならしめたものは、彼れの通貨問題に就いての發言であつたといふから、(Letters to Frower, p. 46) 一八〇九年八月二十九日以後の事ではなくてはならぬ。一度び相識つて後此の素養職業性情を異にする二人は漸く相許すこと深く、二者は屢々相往來して互に其家に客となつた。而して二人は、會へば必ず經濟學上の問題を論じたものらしい。マリア・エジワース (Maria Edgeworth) は記していふ、二人は「相携へて眞理を探求し、之を發見せる時は、先づ之を發見せしもの、誰なるかを問はずして歡聲を揚げた」と (Hollander, p. 48)。但しマルサスは大概の問題に就いてリカアドオと説を異にした。リカアドオはマルサスの人口論を賞揚し、或は此書は彼れに國富論から得たものに次ぐ所の興味を感せしめたといひ、(Letters to

Malthus, p. 107) 或は此大著(人口論)に對する反對者の攻撃は、ただ其力を證明することにのみ役立つた」と言つて(原論第三版第三十二章居るが、併し爾餘の問題に就いては、通貨問題に就いても、穀物關稅問題に就いても、價值論、地代論、利潤論、外國貿易論、恐慌論に就いても、二人は常に説を殊にした。保存されてゐるマルサス宛てリカアドオ書簡集は、二者の論争記録だと言つても差支ない程である。而してリカアドオの思索を刺戟し、其學說發展の方向に影響する所最も大なりしものは、即ち此のマルサスとの論争であつた。一八一五年に出たリカアドオの「低廉なる穀物價格の資本利潤に及ぼす影響」を論じた小冊子は、短小の紙幅内に始めてリカアドオの分配論の骨子を示した、極めて重要な作物であるが、此著作は一八一三—一四年の議會に於ける穀物關稅案の討議に依て促されたものたると共に、一面マルサスとの論争の産物と解しても差支ないのである。ミルはリカアドオに、此小冊子中に述ぶる所を更に詳細に説明せんことを奨めて遂に其「原論」を著さしめた。而かもリカアドオをして其興味を持續せしめ、能く其の不得意なる執筆の勞に堪へしめたものは、マルサスとの論争であつたらうと言はれて居る (Hollander, p. 49)。



二人の論争は原論刊行の後も猶ほ行はれ、晩年リカアドオを最も惱ました、價値尺度として生産上に投入せられた勞働量(リカアドオ)と一貨物が支配する勞働量(マルサス)との何れを取るべきやに關する主張反駁は、殆どリカアドオ死去の時迄續けられたのである。

リカアドオの處女作は、一八〇九年八月二十九日新聞紙「モニング・クロニクル」(Morning Chronicle)が無署名を以て掲げた「金の價格(The Price of Gold)」と題する寄書である。株式仲買として株式市場金融市場の實情に通曉せるリカアドオの最初の著作が通貨問題を主題にしたとは、偶然ではない。而してリカアドオを促して此文を作らしめたものは、其當時の不換銀行券増發に基づく銀行券に對する地金の騰貴及び外國爲替相場逆勢の事實であつた。是より先き對佛戰爭は一七九三年に開始せられたが、一七九七年に至り政府は正貨引出を恐れて、三月二十六日の樞密院令を以て英蘭銀行の銀行券兌換を停止し、次で此樞密院令は、五月三日の銀行制限法(Bank Restriction Act)に依て追認せられた。併し斯く銀行の兌換義務は免除

せられても、其爲め銀行券が濫發せられるといふ事實は久しく起らなかつたが、一八〇八年に至り、英國經濟界に投機熱が起り(世評によれば南米との貿易開始の爲め)物價が騰貴した時に際し、英蘭銀行は、一には高利制限法の爲め割引利率の引上を妨げられ、一には銀行自身投機熱に感染して些か融通を放漫にした結果、銀行券の發行高は一八〇八年十一月に一七、四六七、一七〇磅なりしものが翌年五月には一八、六四六、八八〇磅、更に八月には一九、八一一、三三〇磅に上つたといふ事實があると共に、金地金の市價が一八〇六、一八〇七、一八〇八年を通じて騰貴し、造幣公價は一オンス三磅十七志十片半であるのに、市價は一八〇九年に入つては四磅九志四磅十二志の間を上下した。若し之を四磅十志とすれば、造幣公價を超過するところが實に百分十五半である。是と同時に大陸諸國に對する爲替相場が甚だ英國に不利となつた。一八〇八年後半期、一八〇九年初の三個月を通じて漢堡及びアムステルダムに對するものは、爲替平準より下ること百分十六乃至二十、巴里に對するものは更に此以上に及んだのである。

リカアドオは此の變態現象を見て、其原因を説明し、是に對する救濟手段を提議

した。彼れは別に公表する意思なくして此文を草したのであつたが、前記モオニ  
ング・クロニクルの社主ペリー(Perry)の勸誘に會つて、多少の躊躇なきにあらざり  
しも遂に其掲載を承諾したのである。(Three Letters on the Price of Gold by David Ri-  
cardo. Edited by Hollander. Baltimore. 1903.)

リカアドオは金地金の騰貴を兌換廢止に基づく英蘭銀行券増發従つて其價值  
下落を以て説明する。先づ金地金が一オンス四磅四磅十志四磅十三志に騰貴し  
たのは銀行制限法定以後の事なる事實を指摘した後、彼れは「英蘭銀行が其銀行  
券を正金を以て支拂ふ以上は、金の造幣價格と市價との間に大差を生すべき筈が  
ない」と斷定する。更に別に銀行券の價值下落を證明するものは爲替相場の逆勢  
である。元來爲替相場は、金の現送費額を超えて爲替平準以下に下降することな  
く、同時に又是以上騰貴することはない筈である。是が爲替相場騰落の自然的限  
界である。然るに今爲替相場が遙に此限界外に逸脱してゐるのは、商人が債務支  
拂の爲め外國に金を輸出しようとしても、彼れが有するものは金でなくて銀行券  
であり、此の銀行券を金に換えんとする時は、一オンス三磅十七志十片半の代りに

四磅十三志を支拂はなければならぬから、其處で不利なる相場を以て爲替手形を  
買入れる外に途がない爲めだといふのである。併しリカアドオは直に銀行券兌  
換の復活を要求しては居らぬ。彼れは銀行券發行額の收縮に由て金紙間の價差  
を消滅せしめよと主張したのである。「當初は正金支拂の義務を負はしむること  
なく、先づ議會の命令に由り、銀行をして二百萬若しくは三百萬の金額に至る迄漸  
次に其銀行券を流通より回收せしめよ。然る時は、吾人も間もなく金の市價は三  
磅十七志十片半なる其造幣價格迄下落し、一切貨物も亦た同様の下落を閱みし、諸  
外國との爲替は上記限界内に止まることを見るであらう」。(pp. 9-14)

此のリカアドオの寄書に對して起された許多の駁論の一に、九月十四日同じく  
「モオニング・クロニクル」に掲げられた銀行券の友たるも、銀行理事者たらざる者「A  
Friend to Bank Notes but no Bank Director」なる一匿名氏の寄書があつた。是に答ふる  
爲めリカアドオは同二十日、此度はRなる署名にて再び寄書し、是に對する匿名氏  
の第二の寄書は十月三十日の紙上に現れ、リカアドオは十一月二十三日掲載の第  
三寄書を以て是に答へ、新聞紙上の論争は是で打ち切られた。リカアドオは續い

て此の通貨問題に關するその意見を一層公平なる討議に適せる形態に於て再び公表するを適當と思惟して、其の最初の單行著述たる「地金價格の騰貴」(The High Price of Bullion, a Proof of the Depreciation of Bank Notes)と題する小冊子を書いた。其公刊は一八〇九年序文日附は一八〇九年十二月一日である。而して此小冊子に於て、彼れは金銀の國際的分配、通貨の價值を説明すると共に、利率を以て通貨量の増減を下すべからざる所以、及び英國に於ては金が價值の標準尺度たることを論じたが、通貨の過剰又は不足の指表たるものは金利率なること、及び價值の標準尺度は銀なることを主張したのは「銀行券の友」であつたから、リカードオの處女作の形態は、彼の新聞紙上の論争に負ふ所があつたものだと言はなければならぬ。而して此のリカードオが其人を知らずして説を戦はした匿名の論敵は、當時既に彼れと相識なりしと認めらるゝ友人ハッチェヌ・トラヴァだつたのである。(Letters to Trower, pp. VI-VII & Appendix)

「地金價格騰貴論」の所説も新聞寄書と同趣旨に出で居る。地金の騰貴といふは、正確を缺いて居る。實際に價值が變動したものは、銀行券である。銀行券の價值が下落したのは、其發行額が過大なる爲めであり、發行額が過大に上るのは、英國銀行が其發行銀行券兌換の義務を免除されて居るからである。而して是等一切の弊害を救済する方法は「英國」銀行が漸次に其發行券流通額を減少して、終に殘る者が其の代表する鑄貨と同價值なるに到らしむると、即ち換言すれば、金銀地金の價格が其造幣公價迄引下げらるゝに到らしむることにあると謂ふのである。

「地金價格騰貴論」は直ちに下院議員フランシス・ホオナア(Francis Horner)の活動を促し、ホオナアの動議に基づいて、議院は二月十九日、地金騰貴の原因を調査し、及び流通要具並に大不列顛國諸外國間の爲替状態を考察する爲めの委員會を指名した。所謂地金委員會(Bullion Committee)が是である。委員會が六月八日議院に提出した報告書の主旨は、リカードオの説と同軌に出でた。報告書は金價騰貴の事實を不換銀行券の増發なる原因に歸し、又爲替逆勢の「少くも」一部分は、貿易状態より生ぜずして、我が國內通貨の相對價值變動より生じたものでなくてはならぬ」といひ、結局、現在に對する救濟法又は將來に對する保障は、英國銀行の正貨支拂を停

止せる法律の撤廢以外に指摘すべきものなしと斷じた(The Paper Pound of 1797-1821. A Reprint of the Bullion Report. With an Introduction by Edwin Cannan. 1919. pp. 32, 68)。  
報告起草者の一人たるホオナアは自ら記して、此報告書の長所は「その極めて平明直截の語を以て真正なる學說(the true doctrine)」と、此學說を閑却するより生ずる大弊害の存在とを確説せる點にある」と言つた。茲にリカアドオの名は擧げられて居らぬが「真正學說」は即ちリカアドオの説である。故に「地金報告書」に對する批評は、リカアドオ其人に對する批評となる。是れ即ち彼れが此報告書に攻撃を加へたチャアルス・ボサンケット(Charles Bosanquet)の「地金委員會報告書」に對する實際的批評[Practical Observations on the Report of the Bullion Committee. 1810]に對して「ボサンケット氏の地金報告批評に答ふ」[Reply to Mr. Bosanquet's Practical Observations on the Report of the Bullion Committee. 1811]を著した所以である。

リカアドオは逐次ボサンケットの批評に答へ、之を要するに、ボサンケット氏は正貨支拂の爲めに大なる弊害の生ずべきことを信じ、又我が輸入減少し輸出増加するにあらざる限り、爲替相場の上に於ける何等の改善、地金價格の上に於ける何等の下落を通貨減少から期待し得ぬものであるが、彼れを以て見れば、銀行券の收縮は我國現在の輸出入の秩序を毫も攪亂することなしに地金價格を下落せしめ、爲替を改善することが全然明瞭だと主張した。(ibid. Ch. IX)

リカアドオの通貨論は、一八一六年の「經濟的にして且つ安全なる通貨の提案」(Proposals for an Economical and Secure Currency; with Observations on the Profits of the Bank of England, as they regard the Public and the Proprietors of Bank Stock)に至つて更に一發展を示した。彼れの提案は、即ち紙幣を以て正貨に代用するの利益と、通貨と本位金屬との等價維持の利益とを併せ收めんが爲には、紙幣を兌換するに正貨を以てせず、地金を以てすべしと謂ふに在る。曰く、本位貨幣自體免れざる變動以外に通貨の價値に何等の變動なからしめ、同時に、最も費用少なき要具を以て流通を行はしめること、是が通貨をその達し得べき最も完全なる状態に達せしむる所以である。而して吾々が是等一切の利益を收むる方法は、銀行券と引換にギニーを交附する代りに、造幣標準に従つて未鑄の金又は銀を交附するの義務を銀行に負はしむることである。斯くする時は、紙幣が一度び地金價格以下に下落すれば、必ず其流通額

が收縮する。紙幣が地金價值以上に騰貴することを防止する爲めには英蘭銀行の標準(金一オンス三磅十七志)を以て地金と引換に銀行券を交附するの義務を銀行に負はしめねばならぬ。銀行の煩勞を過大ならしめぬ爲めには三磅十七志十片半の價格を以て銀行より買ひ、若しくは三磅十七志を以て銀行に賣る金塊量は、一回二十オンス以下であつてはならぬと(sec. IV)

此書は「地金價格騰貴論」第四版の附録に胚胎し、而して此附録は「エデンバラ評論」に於けるマルサスの批評に答へんが爲めに草せられたものであるから、此點に於てもマルサスはリカアドオの著作に刺戟を與へて居る(Hollander, p. 49)のである。リカアドオは一八一〇乃至一四年の頃、私信に於てもマルサスと通貨問題爲替問題に就いて頻りに説を戦はせた。

上記諸著作に於ける貨幣論を約説して之に加ふるに僅少の修正を以てしたものが、主著「原論」第二十七章の通貨及び銀行論である。予が僅少の修正といふのは、「原論」の樞軸をなせる勞働價值法則が貨幣金屬の價值に適用せられたことを意味して居る。曰く「金銀も他の一切貨物と同じく、之を生産し、且つ之を市場に齎すに

必要なる勞働に比例してのみ價值を有する。金が銀よりも高價なること十五倍なるは、金の一定量を獲んが爲め、銀に比して十五倍の勞働量を必要とするからである(3rd. ed. p. 421)。併しリカアドオは貨幣の貨幣としての價值は、必しも其素材たる金銀の價值に拘束せらるゝものでないことを認めて居る。國家が貨幣鑄造を行つて、而して何等造幣料を徴せぬ場合には、鑄貨は量目品位の等しき同金屬の他の如何なる個片とも價值を同じうするが、國家にして鑄造に對して造幣料を徴收する場合には、貨幣の價值は此の造幣料額丈け地金の價值を超過する。併し造幣料額は必しも鑄造に必要な勞働量に比例するものではないから、貨幣の價值は容易に投下勞働量に基づく金銀の價值と離隔せざるを得ない。斯く貨幣の價值が金銀の價值以上に上り得るのは、一に數量の制限に因るものである。乃ち曰く、「國家獨り鑄造を行ふ限りは……造幣料徴課には際限があり得ない。蓋し鑄貨の數量を制限することに依つて、其は想像し得べき如何なる價值迄も之を引上げ得るからである」と(p. 422)。此理は又、一紙片に過ぎぬ紙幣の流通を説明する。紙幣は「何等の内在價值を有せぬけれども、其數量を制限することに依つて、其交換價值

は同稱呼の鑄貨又は其鑄貨に含有せらるゝ地金に等しいのである。此理を以て推せば、紙幣が價值を保つには必しもその正貨に兌換せらるゝことを要せぬ。必要なることは、たゞ紙幣の數量が適宜に調節せらるゝことのみである。たゞ經驗に徴すれば、無制限なる紙幣發行權の濫用せられぬといふ事がないから、兌換の義務を負擔せしむることが、最も適當なる制限監督の方法だと謂ふのである(940)。

上述する所に由て、リカアドオが貨幣數量説の主張者であることは、明白である。而して此主張は終始毫も變易せぬ所であつて、例へばモオニング・クロニクル第二寄書中に「我が流通用具にして五分一増加したとすれば、此の五分一が回収せらるゝ迄、金及び貨物の價值は其現狀に止まるであらう。銀行券の量を増加すれば、價格は更に騰貴するけれども、予が熱心に主張する如く、五分一を回収すれば、金及び他の一切貨物の價格は其の正常なる平準を見出すべく……金一オンスの代表者、即ち銀行券三磅十七志十片半は常に金一オンスを購ふであらう」(The Letters, p. 18) 過剰より生ずる外、貨幣價值の下落は存し得ることなし。貨幣は如何に「品質量」且低下するも、その過剰なるにあらざる限り、造幣價值を維持するであらう……」

(Reply to Mr. Bosanquet p. 95)「貨幣量の増加なくしては、一切貨物が同時に騰貴するといふことはあり得ない」(Principles, p. 101)「量は凡ての物の價值を左右する」。是は凡ての貨物に就いて眞實であるが、恐らく他の如何なるものよりも貨幣に就いて然る。一八二二年六月十二日於下院演説を明言したのである。

一八二三年議會閉會後、ギャトコム・バークの邸に歸つたリカアドオは、餘暇を割いて「國立銀行設立案」(Plan for the Establishment of a National Bank)を書いた。然るに彼れは此年の秋病死したので、案は翌年遺稿として公にされた。此中にリカアドオは、發行銀行の發行事務と資金貸出事務とを嚴別し、二者必しも同一機關をして行はしむるの必要なことを力説した(The Works, p. 503)。リカアドオが紙幣發行の利益は、私人の收得すべきものでないとして、此種の業務の國有國營を主張することは、既に「經濟的にして且つ安全なる通貨提案」に始まつて居るが、今此遺稿中に、彼れは具體的に其實行方法を詳述したのである。「金價論」を處女作とするリカアドオは、又其遺稿に於て國立銀行案を述べた。通貨問題は、リカアドオの經濟學者としての生涯と特別の因縁を有したのである。

併しリカアドオの興味は、久しく通貨問題のみに捉へられてはゐなかつた。「原論」の序文にリカアドオは、土地の全産物が地代利潤及び賃銀なる名稱の下に地主資本家及び勞働者の間に分配される。此分配を左右する法則を決定することが「經濟學の主要問題」と謂つて居るが、前記の如く、此分配法則の骨子は、既に一八一五年の小冊子「低廉なる穀物價格の資本利潤に及ぼす影響」に示されて居る。而してリカアドオを促して此小冊子を書かしたものは、即ち一八一三—一五年に於ける穀物關稅法改正に關する論争であつた。

穀物關稅論争の端を開いたものは、一八一三年五月十一日に發表せられた、下院特別委員會の穀物貿易に關する報告書、及び六月十五日右委員會々長バアネル(Henry Parnell)の議場に於ける、現行穀物法改正の必要を述べた演説であつた。當時現行の穀物法は、一八〇四年に改正せられたもので、輸入小麥一クオターに對して國內價格六三志以下なる時は二四志三片の重税を課し、その六三乃至六五志の時は二志六片、更に六六志以上なる時は税を六片に下すものであつたが、委員等は此

の六三志なる課稅價格の引上を可とする結論に到達したもので、斯くするとが英國々民をして、其自國の土地よりして充分なる供給を産せしめ、且つ同時に穀物價格を低減せしむる所以だと言つたのである。此の特別委員會が指名せられた當時に於ては、小麥の價格は遙に課稅價格を超過してゐたから、一八一一年—一〇六志五片、一八一一年九五志三片、一八一二年—二六志六片、一八一三年上半期—一六志以上、特別委員會の任命は、穀價の下落を憂ふる地主階級の代表者が之を提議したものだといふのは速断に失するけれども、此問題の討議開始後に於て異常なる豊作の爲め穀物は急激に下落したので、十二月に於ける小麥價格七三志六片、地主及び小作農業家の困窮は、穀物法改正の要求を甚だ切實なるものとならしめた。地主は連年の高價格に慣れ、又之を豫想して頻りに共有地の圍繞を行ひ、普通價格を以てしては收支償はざるが如き土地の耕耘を開始し、又平生の生活を豪奢にした。小作農業家も亦た同じ豫想の下に資本を土地に投下し、又高率の地代を以て其小作契約を更新してゐた。故に今穀價の下落に遭つて大恐慌を感じたのは異しむに足りないのである。他面に於て、穀物法の改正に反對する世論も喧しくなつた。

一八一四年の始めに「穀物法に關する」請願書百三十、法案に反對なるもの百七十であつて、ニユウ・キャスル市の請願書の如きは、法案を通過せしめんと努め、穀物價格を騰貴せしめ、困苦と荒廢を製造家と工人との間に撒布して攝理の惠福を此國より奪はんとする者等の兇惡なる努力といふが如き言辭を用ゐたほどであつた。其間に、穀物價格は回復の徴を示さず、農業階級の窮狀は其極に達したやうに見えた。一八一五年二月議會は「緊急の故を以て、穀物法改正問題を先づ議事に上せ、商務院次官の原則として小麥の價格八〇志に上る迄は穀物穀粉食用肉の輸入を全然禁止すべしとの提議は、議員多數者の同意を得て、各市よりの反對請願書、院外民衆の騷擾にも拘らず、三月十日其第三讀會を了し、同二十日上院を通過した。一八一三—一五年に於ける穀物法改正問題の終始は、斯の如きものであつた。

此に於てマルサスは、公衆の智識に寄與すべきものを有する者が常に之を爲すのみならず、又その最も有用なるべき時に於てするは其義務である」といつて、急に一八一五年一月、其の學校に於ける講義草稿の地代に關する部分を小冊子として「地代の本質と進歩」(An Inquiry into the Nature and Progress of Rent, and the Principles by which

it is regulated)を著し、猶ほ前後に「穀物法及び穀物價格騰落の農業及び一般國富に及ぼす影響を論ず」(Observations on the Effects of Corn Laws and of a Rise or Fall in the Price of Corn on the Agriculture and General Wealth of the Country. 1814)「穀物輸入制限政策の論據」(The Grounds of an Opinion on the Policy of Restricting the Importation of Foreign Corn, intended as an Appendix to Observations on the Corn Laws. 1815)を書いた。エドワード・ウェスト(Sir Edward West)は A Fellow of University College, Oxford なる匿名の下に「土地への資本投用」(Essay on the Application of Capital to Land, with Observations shewing the Impolicy of any Great Restriction of the Importation of Corn, and that the Bounty of 1688 did not lower the Price of It. 1815)を書いた。トレンヌ大佐は「穀物貿易論」(An Essay on the External Corn Trade, containing an Inquiry into General Principles of that Import Branch of Traffic; an Examination of the Exceptions to which these Principles are liable; and a comparative statement of the Effects which Restrictions on Importation and Free Intercourse are calculated to produce upon Subsistence, Agriculture, Commerce and Revenue. 1815)を書いた。

リカードも二三月の交、低廉なる穀物價格の資本利潤に及ぼす影響を論ず。



輸入制限の不可を證明し、併せてマルサス氏の近業『地代の本質と進歩』及び『穀物輸入制限政策の論據』を評す。(An Essay on the Influence of a Low Price of Corn on the Profits of Stock, shewing the Inexpediency of Restrictions on Importation: with Remarks on Mr. Malthus two Last Publications: "An Inquiry into the Nature and Progress of Rent;" and The Grounds of an Opinion on the Policy of Restricting the Importation of Foreign Corn") を著した。

リカアドオはエストラレンス兩家の著作は、己れの小冊子公刊の後始めて之を見たのであるが(Letters to Malthus, pp. 63, 65)。マルサスとは充分説を戦はした上で書いたのである。リカアドオの書簡集を見ると、彼とマルサスとは一八一四年に入つて通貨及び外國爲替なる「舊問題」から轉じて穀物關稅の影響を主題として論争した。此論争に於てリカアドオが反覆主張したのは、利潤を決定するものは賃銀、即ち食物の廉不廉だといふ事である。農業上の改良又は外國産穀物の輸入行れざる限り、食物、延いて賃銀は騰貴して利潤は減少する。而して一般利潤率を左右するものは、農業資本に對する利潤だといふのがリカアドオの意見である。是に對して農業利潤率は他の産業の利潤率を左右するが、他の産業の利潤率も農業

利潤率を左右する。成程食物の低廉は利潤騰貴の原因ではあるが、原因は猶此以外にもある。例へば新市場發見せられて、舊よりも大なる外國貨物量を國産貨物と交換獲得することが出来れば、利潤は騰貴し、利子も騰貴する、といふのがマルサスの意見であつた(Letters to Tower, p. 5.)。

マルサスと議論往復を重ねてゐる中にリカアドオの自説に對する確信は愈々堅きを加へた。彼れのマルサス宛書簡の今日保存せらるゝものゝ中、一八一四年六月二十六日附のものから翌年一月十三日附のものに至る八通、皆な同一問題を論じ、同一意見を繰返し主張して居る。其中に彼れは資本の蓄積が利潤の下落を來たすに至る徑路を次の如く述べて居る。曰く「原産物(農産物)の價格騰貴は漸次の資本蓄積の爲めに生じ得る。而して資本の蓄積は、勞働に對する新需要を造り出すことに依つて人口に刺戟を與へ、延いて劣等地の耕作、又は改良を促進するであらう。併し此事は、利潤を騰貴せしめないで下降せしめるであらう。奈何となれば、常に賃銀率が騰貴するのみでなく、より多くの勞働者が雇傭せられて、是に比例する原産物收穫の與へらるゝことがないからである」。資本の蓄積は利潤を下

降せしむる傾向を有する。何故ぞ。蓄積は必ず食物獲得の困難増進を伴ふからである。但し農業上の改良の是に伴ふときは、此限りでない。若し資本の蓄積に連れて、新なる肥沃の土地を此島國に附け加へることが出来れば、利潤は終に下降することがないだらう (pp. 48, 52)。

右段抜抄の書簡中に、吾々は既にリカアドオの分配理論全體の萌芽を認めることが出来る。而して此のリカアドオの學説は、第一に人口原則の承認を前提として居る。「勞働に對する新需要延いて賃銀の騰貴は、人口に刺戟を與へる。而して此の増加した人口を養ふ爲めの土地の食物産出力は何うであるか。リカアドオは土地收穫遞減の法則を當然の理として承認して居る。農耕上の改良が行はれるか外國産穀物が輸入されるかしなければ、穀物の價格は人口増加に連れて必ず騰貴する。その騰貴するのは、地味劣等の土地を耕さなければならぬやうになるからである。地味劣等の土地を耕さなければならぬのは、既耕の土地に累ねて資本を投じて、生産物が比例的に増加せぬからである。

此外にリカアドオは、明瞭に言つては居らぬが、利潤率平均の法則を其分配理論

の鍵にして居る。即ち彼れが農業資本の利潤が爾餘一切の利潤率を左右すると言つたのは、即ち右の平均法則を認めるものに外ならぬ。何故農業利潤率が他の利潤率を左右するかといへば、それは此の兩者の間に甚しい高低の差がある場合、資本が利潤率の低い處から其の高い處に移動して之を平均せしめるからださより外には解せられぬ。さて既に農業と爾餘産業との間に利潤率の平均があることすれば、同じ農業資本の利潤は、その耕す土地の肥瘠如何を問はずして均一に歸せねばならぬは、勿論の事である。然るに今、資本の蓄積は人口増加を刺戟し、人口増加は劣等地の耕作を促し、劣等地の耕作即ち食料生産の困難増進は利潤を下落せしめ、而して農業利潤率は土地の肥瘠如何に拘らず均一でなければならぬとする。肥沃地を耕すもの、始めの利潤と新なる低率の利潤との差額は、果して何を構成し、又誰れの收得に歸するかの疑問が起る。これが地代となるのである。リカアドオの曰く：「地代は常に利潤から差引かれたものである」地代は如何なる場合にも、富の創造ではない。それは常に既に造り出された富の一部であつて、必然資本利潤の負擔に於て享受せらるゝものである」と (Letters to Malthus, p. 59)。

即ちリカアドオに従へば、地代は利潤の下落に因て生じた罅隙を占め、利潤の下落と共に益々其の舊範圍を蠶食して行くものである。故に利潤論は、地代論を俟たなくては完全に説明することが出来ぬ。利潤論の反面は地代論、地代論の反面は利潤論となるものである。

リカアドオはマルサスと己れ自身との行論の態度を比較して、マルサスが實際的の細目に捉はれ過ぎることを言ひ、之を無視して抽象的推理を行ふ自己の方法を辯護したことがある。曰く「若し予が餘りに理論的であるならば、予は事實然りと信ずる、貴下は餘りに實際的であると思ふ。經濟學上に於ては非常に多數の結合、非常に多數の作用原因が存するから、凡ての變動の原因が分明であり、其結果が適當に評價せられてゐることが確實なるにあらざる限り、特定の學説を辯護する爲め經驗に訴へるといふ事には大なる危険がある」と(Letters to Malthus, p. 96)。而して其抽象的推理を進めるに當つて、謂はゞ公理としてリカアドオに與へられたものは、上記の人口増加、土地收穫遞減及び利潤平均の三法則であつた。リカアドオの後に於て、經濟學を殆ど幾何學のやうにして説いたシイニオーア (Nassau William

Senior) が其「經濟學」中に經濟學の四根本命題として(一)各人は富の追加を獲得するに能ふ限り小なる犠牲を以てせんと欲すること。(二)世界の人口即ち世界に住む人の數は、道德的又は肉體的害惡に依て、若しくは習性上住民各階級の個人が必要とする富の不足の危懼に依てのみ制限されること。(三)勞働及び他の生産要具の力は、其生産物を更に生産の手段として用ゐることに依て無限に増進せしめ得ること。(四)農業上の技術同一なる場合には、一定地域内に於て投せられた追加勞働は大體に於てより少なき比例的收穫を生ずる。換言すれば、投せられた勞働の増加と共に總收穫は増加するけれども、收穫の増加が勞働の増加に比例せぬことを挙げたのは、リカアドオの理論的前提を稍々趣を變へて、明確に列記したものと云ふべきである。

「低廉なる穀物價格の資本利潤に及ぼす影響」に於ては、書簡では稍々蔭になつてゐる地代論が詳しく説かれてゐる。地代とは「土地の本原的内在力 (original and inherent power of the land) の使用に對して地主に與へる報酬」である (Work, p. 375 n.)。

此意味に於ける地代は、リカアドオに由れば、土地生産物の價值總額から生産費を控除した餘剰を以て成るものである。されば、農業資本の普通慣行の利潤率及び土地耕作に屬する一切支出の合計が全生産額と相均しき場合には、何等の地代あることなく、又全生産額の價值が僅に耕作に必要な支出に均しき場合には、地代も利潤もあることなきは當然である (Wolfs. p. 371)。例へば肥沃な土地の豊富な新しい國で、或人が土地に投ずる資本は小麥二百クオタアに相當する價值があつて、其一半は建物道具の如き固定資本、一半は流動資本から成り立つものとし、而して兩資本を償つた跡に猶ほ小麥一百クオタアの價值に相當する生産物があつたとすれば、資本所有者に對する純利潤は二百に對する百、即ち五割たるべし、而して斯して定まつた此利潤率は、商工業資本の利潤を定める。若し其間に高低の差があれば、一方より他方への資本移動が起るからである。資本及び人口が増殖して、位置の便又は地味の劣れる土地を耕す必要が起れば、生産費(耕作費又は運搬費)は増加する。假に此増加が小麥十クオタアの價值に相當するものとすれば、前と同じ收穫を得んが爲めに新しき土地に投せらるべき資本は百十、従つて資本利潤

は五割から二百十に對する九十、即ち四割三步に下降する。そこで始め優等地の耕作に依て收められた利潤は、分割せられて、利潤と地代とになる。此場合には、八十六クオタアが利潤、十四クオタアが地代である。資本人口が更に増殖して、一層劣等なる土地が耕される場合に、利潤の更に下降し、地代の更に騰貴すべきは説明を俟たぬであらう。耕作を劣等地に及ぼすに依て、地代は前に耕された土地に生ずべく、且つ利潤が下落すると正に同一の程度に於て生ずるであらう (p. 373)。新に劣等地を耕さずに、既耕の地に重ねて資本を投下する場合も亦た同様である (p. 374)。

併し斯く地代は新なる富又は収入の創造ではなくて、利潤の削減に依て發生するものだといふ説は、マルサスに存する。地代は天恵に因る餘剰だといふ思想と相容れぬ。リカアドオはマルサスの地代論に「重要な幾多の獨創的見解」が含まれてゐること認め、充分之を推重して居るに拘らず、右の一點に就いてマルサスの非なることを力説するものである。マルサスは地代發生の原因として(一)土地に土地耕作者を養ふ以上の餘剰生産力あること、(二)生活必需品は其自體に對する需要

を造り出すの性質あること、(三)肥沃なる土地の比較的稀少なること、の三つを認め、て居るが、其中でその特に重きを措くのは、前二者である(The Nature and Progress of Rent, p. 17)。マルサスが特に之を力説するのは、地代を以て土地の有害なる獨占から生ずるものと爲す學說に對して之を辯護せんとするに出で、居る。即ち彼れは地代が決して「獨り地主にのみ有利にして、消費者には比例的に有害なる價值の移轉に過ぎざるもの」ではなくて、「國富に對する追加」たり、「神與に係る至貴至重なる土地の性質、即ち能く之を耕すに必要な所以上の人を養ひ得るの性質を明示するもの」たり、「寛大なる攝理の賜」たることを力説するのである(pp. 16, 17)。

アダム・スミスが「農業に於ては自然は人間と共に勞作する。而して其(自然の)勞働は何等の出費を要せぬけれども、其生産物は最も不廉なる勞働者の生産物と同様に價值を有する」といつたのは(Wealth of Nations, ed. by Cannan, vol. I, p. 343)恐らくフイジオクラアトの影響に歸すべきものであらう。此思想はマルサスに繼承せられて上記の章句に現れて居る。リカアドオの地代論は、フイジオクラアト思想の否定を意味するものである。

同時に此地代論は、價格と地代との關係に關するアダム・スミスの學說を否定するものである。アダム・スミスは、別の處では別の說を述べてゐるが、其價格論に於ては、地代が價格の構成要素たり、地代の高下は價格の高下を左右するものと説いて居る。然るにリカアドオに由れば、一般の貨物と同じく、穀物の「交換價值は究局其生産の難易の左右する所」であるから、劣等地の耕作が必要となるに従つて穀物の價值は騰貴するが、一の土地の地代は其土地の純收穫(總收穫から賃銀を控除した餘剩)と最終に耕された土地の純收穫との差額が即ちそれであつて、而して最終地の純收穫が投せられた資本の利潤だといふのであるから、最終地は利潤のみを生じて地代を生せず、穀物價格の騰貴といふことに對して、地代は其原因となつては居らぬのである。故にリカアドオの學說を以てすれば、地代が價格構成要素をなすといひ(Wealth of Nations, vol. I, pp. 51-2, 57, 59)又食物の生産に充てらるゝ土地は、必ず賃銀利潤以上に地代たるべき餘剩を生ずるといふ(Dp. 147-8)アダム・スミスの説は、共に許し難いものでなければならぬ。「低廉なる穀物價格論」の中では、未だアダム・スミスに對して批評といふ程の批評は加へてゐないが、リカアドオの地代

論が當然スミスの地代論の重要部分を覆へすべきものなることは既に此處に見えてゐるのである。

右記の如く、地代は新なる収入の創造でなくて、既に造り出された収入の一部分に外ならぬものとすれば、地主の利害は爾餘諸階級の利害と衝突するといふ結論が生ずる。「爾餘の者は皆な食料獲得の低廉なることに依つて大に利益するものであるのに、地主の状態は終に食物の稀少不廉なる時ほど繁榮なることはない」のである (Works, p. 378)。併しリカアドオは、社會の發達に連れて、自然に地代が騰貴し、利潤が下落する時には反對してゐない。彼れが遺憾とするのは、穀物法の如き人為手段に依て地主の利害が偏重されるのである。但し此場合リカアドオが不知不識の間直ちに資本家階級の利害を以て社會其者の利害と爲すの嫌あることは、否定すべからざる所である。リカアドオは穀物の低廉を望ましいこととしてゐるが、それが望ましいのは賃銀を下落せしめるからである。故に長時間に就いて見れば、労働者の利害は食物生産の難易如何に由て殆ど得喪する所がないと謂つて好い。さうすると、彼れが地主の利害と對立せしめる社會全體の利害なるも

のは、畢竟資本家階級の利害に外ならぬことになる。然らば何故に地主よりも資本家階級の利益を尊重しなければならぬかといへば、彼れは是を證明を要せぬ、當然自明の事と解するもの、如く、此階級の繁榮は資本の蓄積と生産的産業の奨励とに導くといふ意味なるやに解せらるゝ言ある (p. 388) 外には、幾ど其説明と目すべきものがない。此點彼れは、社會全體の利害を判斷するに株式仲買の目を以てしたといふ批評を、恐らく免れ難きものであらう。

「低廉なる穀物價格論」に對する友人等の批評は、リカアドオをして經濟原論の著述を思ひ立たしめた。リカアドオが充分詳細に其意見を説明しなかつたので、二三の人々が之を了解しなかつたこと、ジエムス・ミルが彼れに勸めて、當初から一層詳かに其説明を企てさせようと試みてゐることを、リカアドオは一八一五年八月十八日附のセエ (Jean Baptiste Say) 宛て書簡中に言つて居る。やがて彼れは此勸誘に従つて著述に志した。一八一六年の春のマルサス宛て書簡は、業務の爲めに執筆の妨げられること頻繁なることを嘆じて居る。(一八一六年四月二十四日附、

及び同五月二十八日附マルサス宛書簡)。文章はリカードの長技でない。併し彼れは勉強して此困難に打克つた。一八一七年三月九日附の書簡には「學說其者に就いては何等の懸念を持たぬ」と言つて居る。而して二月末には印刷は既に着手せられてゐた。最後の原稿は三月末に印刷者の手に交附せられたものらしい (Letters to Malthus. pp. 132, 134)。翌月「經濟學及び租稅原理」は公刊せられた。其原標題を記せば

On the Principles of Political Economy and Taxation. By David Ricardo Esq.

出版者は倫敦ジョンマアレー (John Murray) である。本文は組方粗なるデマイ八折版五八九頁に序文四頁索引一三頁が添附せられた。

外面に現れた體裁の上から見ても、此著述が系統的準備を以て着手せられ、充分の推敲を経て公にせられたものではないことは明である。稍々極言すれば、リカードは其思想をば、偶々其の腦裡に浮んだ順序に捉へて之を筆にしたかと思はれる程である。論述の無秩序であるとは、例へば、彼れの價值論は「價值」「自然價格及び市場價格」「價值」と富と。其差別的性質及び「需要供給の價格に及ぼす影響を論ず

る諸章に説かれてゐるのに、其の諸章が第一章、第四章、第十八章、第二十八章に置かれてゐるのを見て、推察するとが出来る。同様に地代論は、第二、第三兩章と「アダム・スミスの地代論を評する」第二十二章、マルサスの地代論を評する第二十九章に説かれ、利潤が第五(※)章に説明せられて、蓄積の利潤及び利子に及ぼす影響が第十九章に論せられ、第八乃至第十六章が連続して租稅を論ずるかと思へば、富國及び貧國に於ける金、穀物及び勞働の比較價值と需要供給の影響とを論ずる第二十六、第二十八兩章の間に、生産者に依て納附せらるゝ租稅が論せられて居る。推敲の不充分に就いては、措辭用語の不嚴密を問はぬとしても、第五章と第八章とが各々二つあるの一事が既に充分之を暴露してゐる。是は第二版に於て改められた。古今の經濟學者中理論家として最高地位を許されてゐるリカードの原論は、體裁上には斯の如き缺點を有する著作である。

然らば内容は如何。前述の如く、リカードが經濟學の主要問題となすものは、分配理論の確立である。而して此點に關しては、リカードの意見は「穀物價格論」著作の時既に定つてゐて、吾々に見える限りに於ては、其時以來何等の新なる疑問

には逢著して居らぬ。リカードは引續きマルサスと往復書簡中に議論を戦はせたが、リカードは其持説を繰返して「予は信ずる、利潤は賃銀如何に由て定まるものである……」。……利潤は賃銀下落する場合に騰貴するであらう。而して賃銀下落の主要原因の一は低廉なる食物並に必需品であるから、生産の便易、即ち低廉なる食物及び必需品と共に、恐らく利潤は騰貴するであらう」(pp. 120, 121)。……地代は富の創造でなくて移轉である。それは地代が高價格の原因でなくて結果たることの必然的結果であることを主張したのである(p. 128)。「原論中に説かれた分配理論と穀物價格論」又は書簡中に説かれたものとの間には、唯粗密の差がある許りである。獨り原論著作に際して新にリカードを惱ましたものは、價值論であつた。此問題に就いては、リカードは自家の舊説の支持すべからざることを覺つて、此問題を考へ直ほしたのである。即ち一八一六年十月五日、彼れはマルサスに告げて曰く、「予は其に關する予の從來の觀念が正しくなかつた爲めに、價格及び價值の問題の爲め大に妨げられた。予の現在の見解も同じく謬つてゐるかも知れぬ。それは予が豫想せる一切の意見と殊なる結論に導くからである。予は

予自身を満足せしむるに過ぎぬ迄も、予の理論に一貫せる形態が附與せらるゝ迄、研究を續けるつもりである」(Letters to Malhus. p. 120)。

此「研究」の結果が原論第一章の價值論となつた

リカードの價值論は、アダム・スミスから出發して居る。スミスに従つてリカードも使用價值即ち效用と交換價值即ち一物の他物を購買する力とを區別した。一物が交換價值を有する爲めには、效用を有せねばならぬことは勿論であるが、事實上效用と交換價值とは必しも並行せぬから、前者は後者の尺度にはならぬ。リカードは貨物を大別して二種類とする。人力を以て其存在量を増加すること能はざるものと、人の努力に依て其量を増減し得べし、且つ其生産上に無制限なる競争の行はるゝものとをそれぞれである。前者にあつては、價值の源泉は其稀少性である。骨董品、稀觀書、古錢、醸造高に限りある特殊の葡萄酒の價值の如きは、是に由て説明される。併し日常賣買せらるゝ貨物の大部分は、後者に屬するものである。此種の貨物の價值は、その生産上に投入せらるゝ勞働量が之を決する。「社



會發達の初期に於ては、是等の貨物の交換價值、即ち交換上一貨物の幾許が他の貨物に對して與へらるべきかを決定する規則は、一に其の各自に費された比較的勞働量に由て定まるのである(Principles. 1st ed. p. 3)。其生産に要せらるる勞働量が増加すれば、其貨物の交換價值は騰貴し、それが減少すれば、交換價值は減少する。但しリカアドオの所謂「費された勞働」體現せられた勞働「必要なる勞働」は、常に一物の生産に直接投入せらるる勞働のみでなく、間接に資本、即ち生産用具の生産に投せられた勞働をも含むのである。例へば、海狸の獵獲に費された勞働といへば、獵具の製作に費された勞働量をも其中に含むのである。又價值が此意味の費用勞働に由て決せらるるとは、資本(機械道具原料等)の使用者と其所有者とが同一人なること否とに由ても、又生産物が利潤及び賃銀として資本家と勞働者との間に如何なる比例を以て分配せらるるかに由ても影響せらるるものではない。蓋し資本利潤又は賃銀率の高低は、各種産業に對して均等の作用を加へるからである(p. 18)。

アダム・スミスも、原始社會に於ては、生産上に費された勞働が交換價值決定の「唯一の事情」であつたことを認めてゐる。併し土地の私有、資本の蓄積が實現せられ

た後の社會に於ては、一貨物の交換價值は、其生産に参加した勞働、土地、及び資本に對する平均賃銀、平均地代及び平均利潤の合計に由て決せられ、市場に於ける現實價格は此の合計額を引力中心として廻轉し、而して斯くして決定せらるる價值を測定すべき最良尺度は、其貨物と交換せらるる勞働量であるといふのが、スミスの意見であつた。リカアドオはスミスの説を以て一貫を缺くことなすものである。

「貨物の現在又は過去の相對價值を決するものは、勞働が生産すべき貨物の比較的數量であつて、勞働者がその勞働と交換して收める貨物の比較的數量ではない」といふのである(p. 11)。

然るに、一物の交換價值が其生産に必要な勞働量に依て決定されること、これは、リカアドオは既に前から主張して居る。「穀物價格論」の一節に、彼れは斯う言つて居る。「一切貨物の交換價值は、其生産の困難が増大するに従つて騰貴する。されば、より多くの勞働が必要となることから穀物の生産上に新しい困難が生じ、一方金、銀、羅紗、麻布等の生産に要せらるる勞働は増加しなければ、是等のものに比較しての穀物の交換價值は、必然騰貴するであらう。反對に穀物、若しくは、種類の如

何を問はず、或る他の貨物の生産が容易となつて、同一生産物をより、少なき労働を以て給することを得るに至れば、其交換価値は下落するであらう。……苟も競争が其の効果を完全に發揮することを得て、或種の葡萄酒の場合に於けるが如く、貨物の生産が自然に依て制限せらるゝことなき處に於ては、其生産の難易は、究局其交換価値を左右するであらう」(Works, p. 377)。

此説と前記「原論」中の價值論とは一致する。然るに、リカアドオは此の「穀物價格論」公刊後に於て價值及び價格の難問題に逢着し、其の前日の説が謬つてゐたことを自ら認めて居ることは前記の通りである(一八一六年十月五日附書簡)。果して此通りであるならば、「原論」の價值論と「穀物價格論」の價值論との間には理論上相容れぬ個所がなくてはならぬ筈である。而して實際それはある。原論中の價值論の章の後半に於て、生産上費された労働量の増減以外賃銀の騰落も亦た貨物の交換価値に影響することを認めたのがそれである。併し此の賃銀率の變動より貨物交換価値に變動を生ずるのは、諸貨物の生産上に用ゐらるゝ固定資本(非消耗品)流動資本(消耗品)との比率に異同あるか、或は固定資本の耐久力に異同ある場合の

事である。曰く、「その生産上に要せらるる労働の増減から起る相對價值の變動以外、更に貨物は又用ゐられた固定資本の價值等しからざるか、又は其耐久力等しからざる場合には、賃銀の騰貴及び其結果たる利潤の下落より生ずる動搖をも免れぬ」(p. 23)。而して其生産上比較的多大の固定資本が用ゐられるか、或は比較的耐久性大なる固定資本の用ゐられる貨物のさうでない貨物に對する交換価値は、賃銀の下落即ち利潤の騰貴の爲めに騰貴する。リカアドオ自身の言葉を以ていへば、「…或種の生産に充用せらるゝ固定資本の量と耐久性とに比例して、斯る資本の用ゐられた貨物の相對價值は、賃銀と反對に變動し、賃銀騰貴する時は下落する…」(p. 41)のである。

此の價值論後半の部分は、リカアドオが「新奇なる學説たることを充分自覺しつゝ唱へたものであつた。然るに學者の批評は、此部分には加へられないで、重に一貨物の價值は其に費された労働量に由て決せらるゝこの命題に加へられた。批評家の最も有力なりしものは、蓋しトレンスとマルサスとであらう。トレンスは、アダム・スミスが労働費用が價值を決定するといふ原理を原始社會に限つたのは細

心にして當を得たもので、リカードが更に一步を進めて同じ原則を文明社會にも適用したのは却つて誤謬であつたと謂ひ、結局資本を構成する原料と賃銀との比例等しからざる時、一業に於ける賃銀率の偶々他よりも高き時、資本の耐久力一ならざる時、耐久力は久しきも、支出賃銀額の同じからざる時は、生産物の價值は之に投せられた勞働量に比例せざるべし」と謂つた(Letters to McCulloch, p. 16)。マルサスの批評も類似の論據に立つものである。彼れは社會發達の最初期に於ても、勞働は既に生産費の唯一要素ではなくて「収益の遲速」(varying quickness of return)なる一新要素は、全然勞働とは關係なく價值決定の一必要々素を形成する。文明社會に於て同じ原因の作用することは、論を俟たぬと謂つた。(Principles of Political Economy, 1st ed. 1820, p. 88)。要するに彼れに従へば「一貨物の生産上に費された勞働量は、同時同處に於ける相對價值の正しき尺度でもなく、又異なる諸國及び異なる時代に於ける眞交換價值の尺度でもない」のである。(pp. 107-8)。

併し此にトレンス、マルサスが指摘した點は、既にリカードの顧慮してゐた所であつて、資本耐久力の異同に基づく賃銀の變動から生ずる價值の變動を説明する場合には、論究は自ら此に觸れてゐた。されば、彼れはトレンスの批評に對しては些か不平で、一八一八年十一月二十四日マツカロックに與へた書簡中には「耐久力を同じうせざる資本の生産上に用ゐらるゝ時、價值が勞働量のみによつて左右せられざることは、予之を拙著中に明言したと言つて居る

此處で吾々は、リカードの價值法則の論據を検して見る必要がある。

抑もリカードが其數量の任意増加せらるゝ貨物のみに就いて、交換價值は勞働費用に由つて決せられると謂つたのは、何故であつたか。それは、時々の需要供給の關係上、一貨物の市場價格が一時勞働費用以上に上るとがあつても、數量の任意増加せらるゝ貨物にあつては、供給の増加に因つて價格は再び引下げられなければ已まぬけれども、數量の固定して居るものにあつては、此作用が行はれぬと謂ふに外ならぬものである。市場價格が勞働費用以上に上つた場合に、何故供給の増加が起るか。それは一貨物の市場價格が其勞働費用以上に上れば、其生産者は價格の利潤を收めるので、他の方面から資本が此貨物の生産に集中して來るからである。換言すれば、利潤率の平均を得た時は、即ち諸貨物が其體現勞働量に比例し

て相交換される時だと謂ふのである。リカードは言ふ「されば貨物の市場價格の久しく遙に其自然價格以上又は以下に留まることを防げるものは、各資本家が懐ける、其基金を比較的不利の用途より有利の用途に轉用せんとする欲求である。貨物の交換價值を調節して、その生産に必要な賃銀と資本を其の能率の原狀に復せしむる爲めに要する他の一切の費用とを支辨した後殘餘の價值又は餘剰を各業に於て使用せられた資本に比例するものたらしめるものは、此の競争である」と(pp. 87-8)。而して右に謂ふ貨物の自然價格が、即ち貨物の交換價值又は一貨物が有する購買力である。即ちリカードの分配論の基礎をなす利潤率平均の法則は、又其價值論の基礎をなしてゐるのである。諸貨物間現實の交換比率が投入労働量に由て定められた其交換價值と久しく相離れることを得ないのは、此法則がある爲めである。

併し此説明は、同一額の資本は必ず同量の労働を雇傭することを前提とする。若し此前提が具備しなければ、體現労働量に由て定められた一貨物の交換價值自然價格が其時々の市場價格の引力中心となることを首肯すべき理由は、消滅する

のである。假りに例へば、二人の同じく一萬磅の資本を投じて生産を営む者があつて、一人は其資本の大部分を機械(固定資本)に投じ、一人は労働者を雇傭する爲め賃銀(流動資本)として之を支出し、而して生産物は各々其の投入労働量に比例して賣買されるものとするれば、同じ一萬磅の資本に對して一人が擧げ得る収益は、他の一人よりも甚だ少なかるべき筈である。そこで此の不均一の利潤を平均せしむる爲め、資本が彼の不利の産業を去つて此の有利の産業に移り、供給の増減、従つて一方の騰貴一方の下落に依て利潤率の平均を恢復し、そこで始めて資本の流動が止まつたとすれば、其の平均を得た場合の二貨物の比價が、投入労働量に比例するものでないことは、明白である。故に同額の資本が必しも同量の労働を雇傭若しくは代表するものでないといふことを承認すると、利潤率平均の法則は、労働量が價值を決定するといふ命題の根據とはならなくなる譯である。

リカードは既に此の難點に氣着いてゐる。原論第一章の後半で、前半所說の原則に上記の如き修正を加へたのは、其が爲めであつた。それがトレンス、マルサス等の批評に會つて、愈々此の修正を重要視するやうになつた。

茲に二人の企業家の例を引いて、同一額の資本が同一量の労働を代表せぬ場合に於ける利潤率平均の結果に就いて述べたが、固定資本たる機械や道具は何れも労働生産物に外ならぬから、資本を以て購入せらるゝものは、直接にか間接にか常に労働であつて、同一額の資本の代表する労働量が異同があるといふことはあり得ないを考へるものがあるかも知れぬ。併しリカアドはさう考へない。機械や道具は、過去の労働の生産物である。機械の生産に始め労働が投せられてから、機械が完成して賣却せられる迄には、時間を要する。此の時間の経過といふものに對して或賠償がなくてはならぬ。直接労働者を雇傭する場合には、此の時間の経過といふことがない。其處で、同じ一萬磅の資本を投じて、此金額の賃銀で雇傭し得る労働量と、價格一萬磅の機械に過去に於て投入せられた労働量とは、同一でない。機械に含まれてゐる労働量の方が少ないのである。即ちリカアドは、資本中に於ける流動資本と固定資本との比例の異同をば、最初に労働が費されてから其成果が市場に出る迄の時の遅速として考へ、而して此の時の要素が貨物の交換價值に及ぼす影響を漸く重要視するやうになつたのである。彼れの費用勞

働と共に、生産完成に要する時間の長短が貨物の價值の決定原因たることを明言するやうになつた。一八二〇年五月二日マツカロック宛書簡に、彼れは「此問題に就いて爲し得べき最善の考慮を盡した後、予は貨物の相對價值の變動を來たし得る原因が二つあることを信するものである。第一に貨物の生産に要する相對的労働量、第二に斯る労働の成果が市場に搬出せらるゝ迄に経過すべき相對的時間がそれである。固定資本の一切の問題は、此の第二の規則の下に屬する」といひ (p. 95)、又同六月十三日の書簡に「若し拙著の價值論の章を再び書くとすれば、予は貨物の相對價值を左右する原因は一でなくて二なること、即ち該貨物の生産に必要な相對的労働量と、資本が睡れる時間及び貨物が市場に搬出せらるゝ迄の時間に對する利潤率とであることを認めると言つた (p. 96) ことは、屢々人の引用する通りである。

其間に一八一九年、原論の第二版が出た。書形は第一版と同一である。頁數は少しく組方を密にした爲め、本文が五三五頁に減じた。内容に就いては、第一章を五小節に分つて是に小標題を掲げ、諸處の字句を改めた外に、トレンスの批評に鑑

みて、體現勞働が價值尺度たるの原則に對する例外として、新に「資本が其使用者に復歸する速度の異同なる場合を舉げ、賃銀騰貴し、利潤下落する時は、二貨物中其資本の回轉に比較的長時間を要するものは、其比價下落することを認め、其の勞働價值説を述べるのに一段の慎重を加へたのである。

原論第三版は、一八二一年の早春に出た書型同前、本文頁數五二一。第一章は舊版に比して甚だ面目を改めた。序文は「價值の難問題に關する卑見をば、前版に於けるよりも一層充分に説明せん」ことに努め、又其目的の爲め第一章に若干の増補を加へたと言つて居る。而して前記書簡を知る者には此「増補」が如何なる性質のものであるかは略ぼ豫知する事が出来る。即ち勞働價值法則が固定資本の使用と流動資本回轉の遲速との爲めに修正されなければならぬ理由を説明する事が更に詳細を加へたのである。字句の訂正に就いても、リカードが舊版に於て例へば貨物の交換價值は勞働量に由りて、若しくは一に (solely) 勞働量に由りて定まると言つたのを、殆ど全く (almost exclusively) 勞働に由りて定まると改めた (Principles, 3rd. ed. pp. 3, 13) のは、皆な用意の存する所であつた。

諸貨物の交換價值を決定するものは、其に費された勞働量のみではない。假に二貨物の一方に二倍の勞働量が含有せられてゐても、生産完了生産物販賣に至る迄に經過する時間が同一でなければ、交換比率は一對二ではない。「されば其資本の耐久力の度を殊にする爲め、或は畢竟同一事に歸することであるが、一種の貨物が市場に販出せらるゝ迄に經過しなければならぬ時間の爲めに、此等のものゝ價値は精確にそれに投せられた勞働量には比例せぬであらう。それは一に對する二ではなくて、價値多き方のものが市場に齎さるゝ迄に經過するより、長き時間を償ふ爲め多少是以上となる」リカードは謂つて居る (p. 30)。即ち時間の經過に對する賠償が諸貨物の交換價值と費された勞働に對する賃銀との差額を説明するものとなつてゐる。これが利子制欲説の萌芽はリカードに認められると言ひ得る所以である。

但し斯く生産完了に要する時間が費用勞働量と共に交換價值決定の原因たることを認めても、兩者何れが重く何れが軽いかといへば、リカードは遙に勞働費用に重きを措いた。交換價值の原因としての時間又は利潤の效果は「比較的輕微」

であつて、今一つの原因とは趣を異にする。「されば貨物價値の變動諸原因を評定するに當つては、勞働(賃銀)騰落の爲めに起る結果を全然考慮せぬことは失當であらうが、大に之を重要視することも亦た同じく當を得て居らぬと明言してゐるのである。故にリカードが價値論以外の章に於て、貨物の價値は單に費用勞働量に由て決せらるゝものゝ如く説いたのに差支はない。彼れ自身價値論の章で豫めそれを斷つてゐるのである。(Principles, 3rd ed. pp. 32, 33)。

上述の如く、リカードの價値學説は利潤率平均の法則を基礎にして立てられたものであつて、原則に對する修正の必要も亦た此から起つたのである。然らば、利潤率平均の行はれないところでは、貨物交換價値の法則は何うなるか。其場合には交換價値が全く費用の拘束を脱れるのである。一貨物の價格が費用を超過しても、資本が其生産に集中して其供給を増加せしめ、従つて利潤率を引下げるといふ事が行はれず、又價格が費用以下に下落しても、資本が其産業から他に逃れ、従つて其供給を減少せしめて利潤率を引上げるといふことが行はれなければ、貨物

の交換價値はたゞ需要供給に由て決せられると言ひ得るのみであつて、それは費用に依て何等の拘束を受けるものではない。假令 a 量勞働の生産物と b 量勞働の生産物とが相交換せられても、此交換比率を矯制すべき作用は行はれないのである。

貨物の交換價値が斯く費用の拘束を受けない場合といふものをリカードは顧慮してゐるか。顧慮してゐる。數量の固定した貨物の場合は、無論此に屬するが、數量を任意増加せしめ得る貨物にあつても、國際間の交易は此に該當するものと彼れは説いて居る。而してそれは一に國際間に於ては資本の移動が自由ならず、従つて利潤率に異同があつても之を平均せしむる作用が行はれない爲めである。リカードは一例を按じ、英國葡萄牙間の貿易に於て、英國に於ては羅紗を製造するには一年間百人、葡萄酒を醸造する爲めには一年間百二十人の勞働を要し、葡萄牙に於ては羅紗の製造には九十人、葡萄酒の醸造には八十人の勞働を要する場合に、英吉利に於ける百人分勞働の所産たる羅紗が葡萄牙に於ける八十人勞働の所産たる葡萄酒と交易せられ、英國は此貿易行はれざる場合に百二十人の勞働

を要すべき葡萄酒を僅に百人労働の生産物を以て購ひ、葡萄牙は九十人の労働を要すべき羅紗を僅に八十人労働の生産物を以て購ふの利益あることを説明した。併し、斯く八十人労働の生産物と百人労働の生産物とが相交換されるといふことは、彼れの價值論の原則に牴觸するものである。リカアドオ自身の謂はく、「一國內に於て諸貨物の相對價値を支配する同じ規則は、二以上の國の間に交換せらるゝ諸貨物の相對價値を支配するものではない」(pp. 138-9)。「葡萄牙が英國産羅紗と交換して與ふべき葡萄酒の量は、兩貨物俱に英蘭若しくは俱に葡萄牙に於て製造せられた場合に於けるが如く、各貨物の生産に投せられたそれ〴〵の労働量に由て決定せらるゝものではない」(p. 140)。

何故に此事があるかといへば、國際間には利潤率平均の法則が行はれないからである。リカアドオ曰く、「斯の如くして英蘭は八〇人の労働の生産物に對して一〇〇人の労働の生産物を與へるであらう。斯る交換は、同一國內の個人の間には行はれる筈がない。英吉利人一〇〇人の労働は、英吉利八〇人の労働に對して與へられる筈はないが、英吉利人一〇〇人の労働の生産物は、葡萄牙人八〇人、露西亞

人六〇人又は東印度人一二〇人の労働の生産物と交換せられ得るのである。此點に於ける一個國と多數國との相違は、資本が一層有利なる用途を求めて一國から他國へ移動することの困難と、その同一國內に於て常に一地方から他地方へ動くことの快捷なることを考察すれば、容易に説明せられるのである」(pp. 141-2)。

利潤率の平均が行はれなければ、獨り労働價值學説のみならず、一般に價值論上の費用學説は成立せぬ。交換價値を費用以外の要素に由て説明しなければならぬ事になるのである。其點に於てリカアドオの國際價値論には、費用説放棄論の端緒をなすといふ一面があるとも見ることが出来る (J. Schumpeter, *Epochen der Dogmen und Methodengeschichte. Grundriss der Sozialökonomik. I Abt. 1914. S. 84-5*)。

附記、此解題は未だ盡さぬ所が多いけれども、意外に紙数を費したので一先づ擱筆し、之を補ふ爲め近く別に一文を寄稿する積りである。